事務局管理 No.	20261013

海外活動報告書

一般財団法人いのうえ生命の財団　理事長　殿

氏名	宮本 武門
活動先国名	フランス
活動先（機関名・所属、学会名など）	IATDMCT-SFPT 2026（24th Congress of the International Association of Therapeutic Drug Monitoring and Clinical Toxicology）
活動期間（西暦）	2026 年　9 月 25 日　～　2026 年　10 月　1 日
支援金給付期間	2026 年　9 月 25 日　～　2026 年　10 月　1 日
活動テーマ	機械学習を用いたバンコマイシン初期投与設計に関する研究成果の国際学会発表および TDM・個別化医療に関する最新知見の収集

活動の実施状況及び成果

2026 年 9 月 27 日から 30 日にフランス・レンヌで開催された国際学会 IATDMCT-SFPT 2026 に参加し、抗菌薬バンコマイシンの初期投与設計に関する自身の研究成果をポスターとして発表した。

私の研究では、母集団薬物動態モデルから算出されるバンコマイシンクリアランスを機械学習によって補正することで、クリアランスおよび投与 2 日目の AUC 予測精度を向上させ、より適切な初期投与設計につなげることを目的としている。今回の学会では、これまで国内で進めてきた研究成果を国際学会の場に提示するとともに、TDM、母集団薬物動態解析、個別化投与設計などに関する最新の研究動向に触れる機会を得た。

学会で特に注目したのは、母集団薬物動態解析や TDM の分野に機械学習を導入した研究が複数発表されていたことである。私がこれまで国内学会等で見聞きしてきた範囲では、この領域に機械学習を応用した報告はまだ多くない印象であったが、今回の国際学会では、その活用方法や今後の発展性についても活発な議論が行われていた。また、機械学習に関する発表セッションには会場に入りきらないほど多くの聴衆が集まっており、この研究領域に対する国際的な関心の高さを認識する機会となった。

一方、日本国内の学会と国際学会で取り上げられている研究課題そのものには、多くの共通点があることも分かった。機械学習に限らず、バンコマイシンやタクロリムスなどの TDM 対象薬に関する研究も多く、日本国内で検討されているテーマと近いものが数多くみられた。ただし、研究へのアプローチ方法や検討の深さ、研究チームの規模には違いがあるように感じた。特に、同一の研究チームの中に複数の国籍や専門分野の研究者が参加している例が多く、多様な背景を持つ研究者が協働して研究を進める環境が印象的であった。このような国際的な研究環境が、英語による研究発表や研究者間の議論が日常的に行われる背景の一つではないかと考えた。

また、質疑応答のあり方も印象に残った。これまで参加してきた国内学会では、研究結果や解析方法について確認する形式の質問を多く経験してきたが、今回の国際学会では、それに加えて、質問者自身が結果の解釈や臨床的意義について意見を示しながら発表者と議論する場面が多くみられた。単に疑問点への回答を求めるだけでなく、研究結果からどのような意味を見いだせるのかについて双方が意見を交わすことで、新たな視点や次の研究課題につながっているように見受けられた。研究成果を発表する場であるだけでなく、異なる視点を取り入れながら研究そのものを発展させていく場でもあることを学んだ。

学会参加を通じて、最新の研究動向を知るだけでなく、自身の研究を国際的な研究の流れの中で捉え直すことができた。また、研究成果を国内で共有することに加え、国際的な場で発信し、多様な背景を持つ研究者から評価や意見を得ることの意義を実際の学会の場で学ぶことができた。研究を行うこととその成果を世界へ発信することの双方が研究活動において重要であると認識できたことが、今回の活動における大きな成果であった。

今後の活動予定

今後は、今回国際学会で発表した研究成果について論文化を進めるとともに、卒業研究発表に向けて研究内容を整理し、これまで取り組んできた研究成果を一つの形としてまとめる予定である。

また、卒業後は薬剤師国家試験に合格し、病院薬剤師として臨床現場で経験を積むことを目標としている。実際の患者への薬物療法に携わる中で、今回研究対象とした TDM や個別化投与設計に関する知識を臨床に生かすとともに、日々の診療の中から新たな臨床上の疑問や研究課題を見いだしていきたい。将来的には、それらの疑問を次の研究テーマへと発展させ、患者の治療に還元できる研究に継続して取り組みたい。

さらに、今回の国際学会への参加を一つの契機として、今後は研究成果を国際的に発信できる力も身につけていきたい。私自身も臨床と研究の経験を積み重ね、10 年後には自身の研究成果を国際学会で積極的に発信し、海外の研究者からも評価や意見を得られるようになることを一つの目標としたい。今回はポスター発表であったが、将来的には英語による口頭発表にも挑戦したいと考えている。

海外で活動した感想（現地生活で感じたことや海外留学のメリット等）

今回の渡航は、私にとって初めての海外経験であった。フランスでの生活を通して、建築、食事、治安への意識、人との接し方など、日本とは異なる文化を日常のさまざまな場面で感じた。特に、学会会場で初対面の参加者同士が自然に会話を始める姿や、レストランで客とスタッフが積極的に会話を交わす様子が印象的であった。実際に異なる文化の中で生活することで、世界にはさまざまな価値観や生活様式があることを実感した。

また、国際学会では英語によるコミュニケーションの難しさを強く感じた。特に、英語話者の自然な会話速度で専門的な内容を聞き取ることと、質問の意図を理解した上で自分の考えを即座に英語で表現することに大きな壁を感じた。事前に準備した内容を説明することと、その場で意見を交わすことでは必要とされる英語力が異なることを実際に経験し、英語を学習するだけでなく、自分の考えを英語でアウトプットする経験を積む必要性を認識した。

今回、こうした経験を学生の段階で得られたことは大きな学びであった。学会では、薬剤師や研究者として長年の経験を積んだ方々が、英語で自身の研究成果を発表し、研究者同士で議論する姿を目にした。そのような国際的な研究の場を学生のうちに経験できたことで、今後自分が身につけるべき力を早い段階で具体的に考えることができた。

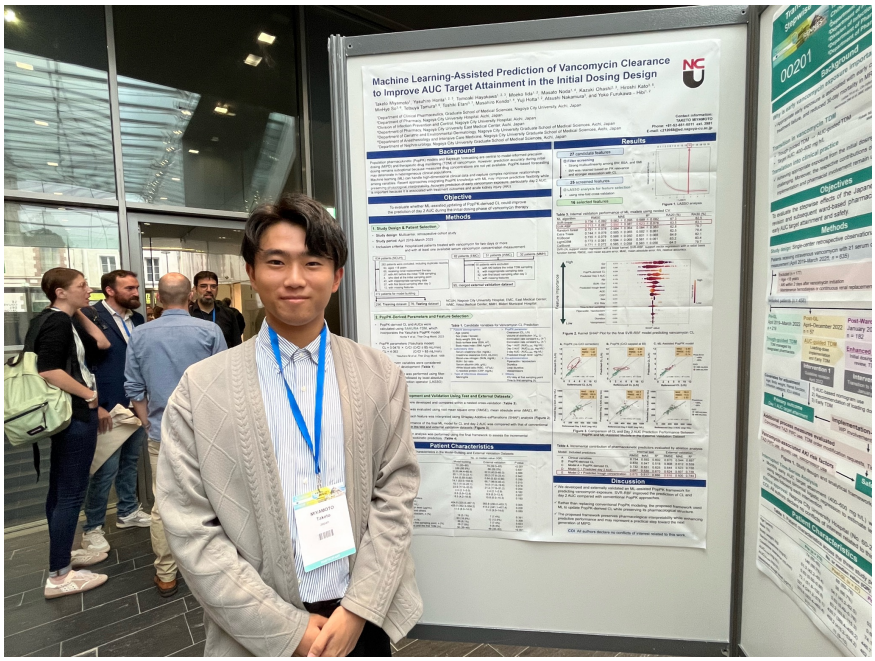
さらに、初めての海外渡航を経験したことで、海外へ行くことへの心理的なハードルも下がった。今後も、国際学会への参加に限らず、さまざまな国や文化に触れる機会を持ち、自身の視野を広げていきたい。今回の海外活動は、研究や英語学習だけでなく、今後の自身の成長を考える上でも非常に貴重な経験となった。

指導教授（所属長）署名

日比陽子

署名欄　宮本武門　　日付 2026/10/13

※活動中の写真を２枚添付してください。いただいた報告書を後日冊子にいたします。


Machine Learning-Assisted Prediction of Vancomycin Clearance to Improve AUC Target Attainment in the Initial Dosing Design
Background
Objective
Methods
Results
Discussion
Patient Characteristics